連載小説

それから物語

第⑩話

（原案　リフレインさん）

動物の国【アニマールド王国】のお城の入り口の門に放たれた一本の矢
矢を放ったウサギ男の正体は？シシラ、リン、ミグ3人の運命は？

「ごめんなさい！もうこんなことはしませんから、アレだけはしないでください！」

「シシラ！どうしてあんなヤツなんかにあやまるんナリ？」

「いいんです！アレさえなければ…！それにボクはコックっていうよりは、何かを作る人になりたいっていうのも本当のことですし……。」

せっかくさっきまでシシラも笑顔を見せてせていたのに、全てが台無しだ。私が思わず反論しようとしたその時だった。誰かが後ろから走ってきた

「シシラ！レウサ！」ゆ後ろを振り返ると、レウサと呼ばれた者と同じように長い耳、尻尾、歯を持った長身のウサギだった。ただ一つ違ったのは矢を放ったレウサのような鋭く突き刺すような目つきではなく、丸くクリッとした青い目をしていた。その青い目のウサギの彼女か放たれた声は、スラリと長い細身の身体からは、とても想像できない大きな怒鳴り声だった。ウサギの彼女は相当怒っているようで、長い耳をピンピンに立たせている。

「レウサ！またシシラを脅してるの！私たちは家族なのよ！どんな時だって年長者が幼い弟を守るっていうのが、筋なんじゃないの！」

その場にいる全員の視線がレウサに集まる。そのレウサの額をよく見てみると、額にあるのはキズではなく、毛を十文字に剃っていることに気づいた。なんとなく【妖怪ウォッチ】の【ダルマッチョ】という妖怪を思い出した。私がそんなどうでもいい事を考えている間にも、シシラを巡る論争は続いていた。

「姉上！なぜ故そこまでしてシシラを守るのですか？」

「さっきも言ったじゃない！家族だからよ。。。」

「……チッ」

レウサは吐き捨てるように舌打ちをすると、一度もこちらの方に視線を送ることなく、ズズズズ……と大蛇に乗ったまま城の中へ入って行った。

「姉上……アリガトウ……。」

「もう、気を付けなさいよ…。ところで、シシラ、後ろの方々は？この王国では見ない顔だけど……？」

「……あっ！初めまして。。。わ、私の名前はミグと言います。そして隣にいるのがリンです。」

「よろしくナリ♪」

「あら？リンっていう名前は、もしかして……？」

何かを思い出したのか、その青い目は大きく丸く見開き、リンの身体を頭の上から足元まで舐め回すように見つめている。

「……？？？」

「いいえ、何でもないわ。。。私の名前はバニラと申します。ここにいるシシラと先程お見苦しいトコロをお見せしたレウサの姉にあたります。此方こそよろしくね。」

さっきのリンの名前を聞いた時のバニラの反応が気になったケド、何だか話がややこしい方向に進みそうだったので、私は気付かなかったように振舞うことにした。

ググググウウゥ～ッ

「……?!」

リンのお腹の音がまた鳴った。リンはその音をかき消そうと慌てて両手でお腹を押さえてはみたが、あまりにも遅過ぎたようだ。

「あはははは…。お腹が空いているのですね。では、こちらへどうぞ。すぐに食事を用意させますわ。」

「……ア、アリガトウナリ…。」

リンは地中深く沈みそうな勢いで頭を下げたまま俯いている。顔は言うまでもなく真っ赤っ赤なんだろう。耳の先まで赤くなっているから、さっきよりも赤くなっているかもしれない。それにしても、私たちは【勇気の石】を探しに来ているのに、こんな呑気な事していていいのかな……？そんなことを考えながら、バニラに案内されるがままついて行くと、目の前には中央に縦長の大きなテーブルが置かれている広く細長い食堂が広がっていた。そのテーブルの上には100人前はあろうかというとんでもない量の御馳走が並んでいる。

「わあ～っ♪どれもこれも美味しそうナリ！全部食べちゃってもいいナリか？」

「どうぞ食べて下さい。」

「いっただきまあ～っす！」

リンの掛け声を合図に、私たちは一斉に御馳走にかぶりついた。

「……あれ？この食べ物どこかで見覚えが……。」

「ああ、それはイーターという肉食植物を調理したものです。ジャングルでは最も危険な植物とされているのですが、その果肉がとってもジューシーで美味とされているので、【アニマールド王国】では高級食材として流通されているんです。」

「ええ～っ！驚いた。まさか、あの植物が食べられるなんて……。」

リンはお皿ごと食べるんじゃないかというぐらいの勢いで目の前に並べられた御馳走に次々とかぶりついては、甘酸っぱい果実のジュースで喉の奥の方へと流し込んでいる。その食べっぷりに目を丸くしながらもメイドたちは慌ただしく次から次へと厨房から熱々の料理を運んでくる。まさにTVで流れていた大食いチャンピオンの光景そのまんまだ。「ふう～っ……。」とリンは一息つくと突然、椅子から立ち上がり、シシラの方を向いて言った。

「どうしてシシラは王族なのに、落ちこぼれとか言われてるんナリか？」

さっきまで騒がしかった食堂が、リンの一言で急に静まり返ってしまった。シシラは深くうなだれ、目線を足元に落としている。バニラの表情は一気に凍りつき深刻な顔つきで、壁の中央あたりに掛けられている巨大な肖像画を遠い目つきで見つめている。リンは、一変した空気にバツの悪そうな顔でにそっと、席に着いた。バニラは静かに目を閉じると、口を開き始めた。

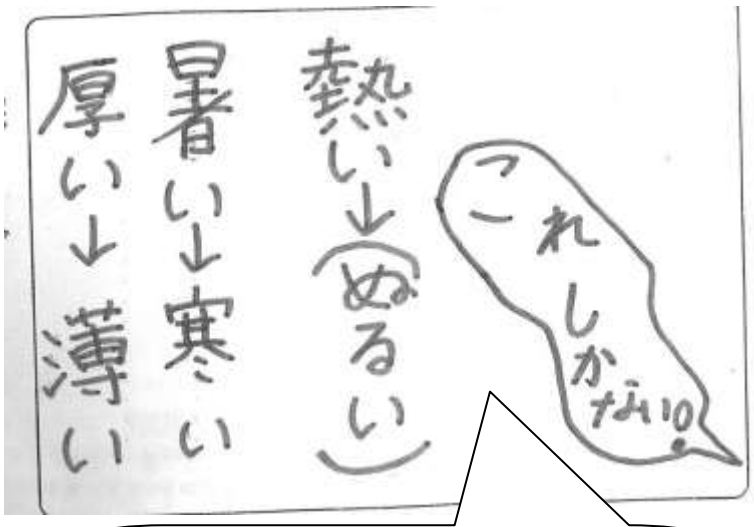
「……分かりました。私から話を致しましょう。少し長めの話にはなってしまうのですが……。」

そう言うと、バニラはポツリポツリと話し始めた。

【つづく】

みんなからの　投稿コーナー！

今回は第４話へのたくさんの投稿がありました。ありがとう！

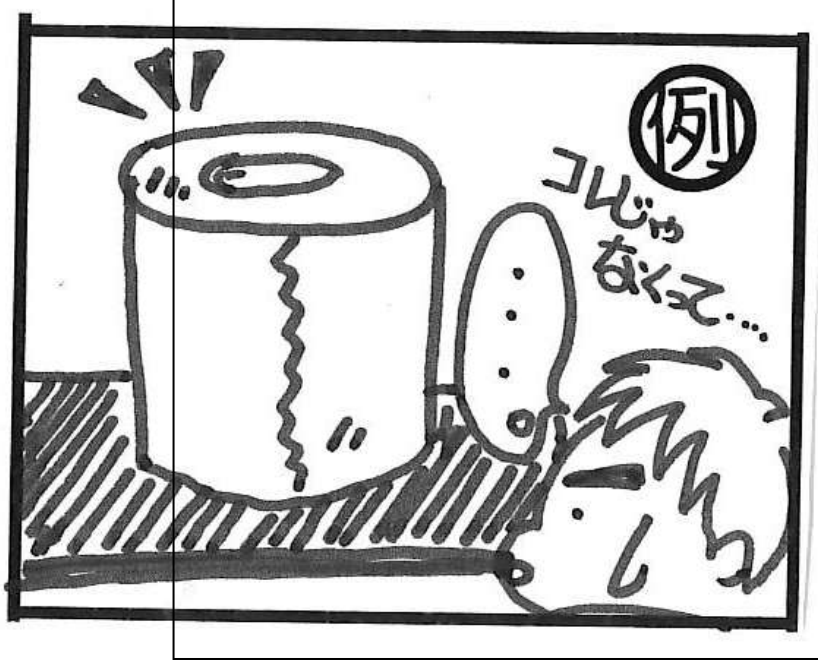


○山田　たかのりさんの作品
うまい！！＾０＾じゃあ、冷たいの反対語も
ぬるい！！これしかないねっ!!!!!（笑）

○後藤　沙綺さんの作品
わかってたのに書けなかったって本当くやしいよね。あと間違えて覚えちゃってる漢字→先生も大学まで間違えて覚えてた漢字うじゃうじゃあったよ

カビゴンさん
の作品
テストで本当にこの答えを書いちゃう子がいるんだよね。。＞＜；
美しいの反対語、知ってる？

次回は「めいきょう君が行く！」の第５話の４コマ目を募集します。
楽しい作品を待ってますよ！



ほっぷすてっぷじゃんぷは　MEIKYO に通うみんなで作るみんなの為の壁新聞だよ！
こんな投稿コーナーがあったら、めちゃめちゃおもしろそう＾０＾こんなのやってほしい。。。。などなど、みんなのヒラメキ頭で、GOOD アイデア浮かんじゃったら、MEIKYO の先生やチューターの先生にすぐ教えてね。待ってま～っす！